

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02734

研究課題名（和文）医療保健福祉分野における多職種間教育が卒後専門職行動に与える短・長期的教育効果

研究課題名（英文）The short- and long-term effects of interprofessional education on health professionals' behaviors

研究代表者

下井 俊典 (Shimoi, Toshinori)

千葉大学・大学院看護学研究院・特任准教授

研究者番号：30364649

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：国際医療福祉大学における3年間の階層的IPEプログラムの教育効果を検討するため、自職種アイデンティティとIPEに対する態度について、後ろ向きコホート調査を3期間実施した。結果として、学習者の非等質性に依存しない同プログラムの教育効果の一般化可能性、2・3年次IPEカリキュラムが最終学年のIPEカリキュラムに対するレディネス形成に大きく影響していること、適切なインストラクショナル・デザインなどの検討の必要性が示唆された。さらに、学習者は古典的な詰込的学習感を強く有する学習者、自律的・充實的な学習観を強く有する学習者、それら2つの学習観を併有する学習者の3群に分けられることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は研究開始当初より、IPEの背景理論としてその背景理論として社会的構成主義を好調しながら、どう学習理論を基盤としてIPEプログラムを開発することを計画していた。本研究の社会的意義として、社会的構成主義に立脚して、教育設計理論に基づいて教育設計したIPEプログラムが、旧来設計のIPEプログラムよりも教育効果が高かったことから、その背景理論の重要性を確認できたことがある。現在、この研究結果を契機として、学習者の学習観調査へと展開している。

研究成果の概要（英文）：To examine the educational effects of a three-year hierarchical IPE program at the International University of Health and Welfare, a retrospective cohort study was conducted over three periods regarding professional identity and attitudes toward IPE. The results suggested the generalizability of the educational effects of the program independent of the heterogeneity of learners, that the second- and third-year IPE curriculum significantly influenced the formation of readiness for the final-year IPE curriculum, and the need for consideration of appropriate instructional design. Furthermore, it was suggested that learners could be divided into three groups: those who strongly felt that learning was classically crammed, those who strongly felt that learning was autonomous and fulfilling, and those who held both of these learning views.

研究分野：専門職連携教育

キーワード：専門職連携教育 多職種間教育 教育効果 学習観

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

患者・対象者およびその家族が住み慣れた住居・地域での生活を継続するためには、医療のみならず保健福祉分野における超領域、超施設、さらには超保険領域的なチーム・アプローチである「専門職種連携実践 (Interprofessional Collaborative; IPC)」が必須である。保健医療福祉の現場での IPC の必要性が高まると同時に、それら専門職の養成教育機関において、学生が IPC 能力を学ぶカリキュラムである「専門職種連携教育 (Interprofessional Education; IPE)」の必要性も叫ばれるようになり、現在、医・薬・看護学では IPE がコア・カリキュラムの中に位置付けられるとともに、国内外の多くの教育機関で IPE が実践されている。

研究開始当初、本研究代表者及び研究分担者が所属していた国際医療福祉大学 (本学) 大田原キャンパスは、3 学部 8 学科を有する保健医療福祉の総合大学である。本学では、IPE 実装に適したこの教育環境を生かし、2003 年より 2~4 年生を対象とした段階的 IPE プログラムである「関連職種連携教育」を配置している²⁾。

我々は既存の IPE 教育効果の評価バッテリー日本語版を作成し、それらを用いてこの「関連職種連携教育」の教育効果を 5 年間 (平成 25~29 年度) にわたって継続的に検討した。その結果、同プログラムのルーブリック形式の IPE 評価表を作成するとともに、同プログラムの短期的教育効果を明らかにすることができた (科研費、基盤 C、26380762)。

しかし同検討は、

- ・各学年及び異なる学習環境などによる、学習者の非等質性の勘案が不完全で、当該 IPE プログラムの一般化可能性について強く言及することができない。
- ・当該 IPE プログラムが 2~4 年生を対象とした 3 年間の教育プログラムであるため、入学当初からの学習者の自職種アイデンティティの形成および IPE に対する態度の変化が明らかとなっていない。
- ・教育・設計理論に立脚して設計された IPE プログラムの教育効果について検討されていない。

という限界を有している。

加えて、本邦の IPE に関しても、その歴史はまだ浅く、IPE に関する体系的な FD やその背景理論についての検討がまだ浅いという課題を有している。

2. 研究の目的

以上のことを背景とし、本研究は

- 1) 本学 IPE プログラム「関連職種連携教育」を経験した卒業生 (以下、IPE 経験者) に対する追跡調査 (量的・質的研究) により、同プログラムの長期教育効果を検討すること。
- 2) 同検討に継続している短期的教育効果を加えた包括的・多角的な検討により、施設内・間連携および保険領域内・間の地域連携能力を有する専門職養成を念頭に置いたより実践的な IPE プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) IPE プログラム

本学大田原キャンパスは、3 学部 8 学科 9 領域 (注 1) を要した、医療福祉の総合大学である。同大学では現在、2 年次から 4 年次まで 3 年間の段階的 IPE プログラムを展開している。各学年の IPE カリキュラムは、2 年次は IPE の基礎知識を座学で学ぶ「関連職種連携論 (以下、2 年次 IPE)」³⁾、3 年次は実際に複数の専門領域の学生がチームを作りながらその知識を模擬患者に対して学内で演習する「関連職種連携ワーク (以下、3 年次 IPE)」⁴⁾、最終学年 (薬学部学生は 5 年生が対象) は「関連職種連携実習 (以下、4 年次 IPE)」である。これらの IPE カリキュラムのうち、2・3 年次 IPE は必修科目、4 年次 IPE が選択科目となっている。

注 1: 保健医療学部 (看護学科、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科、視機能療法学科、放射線・情報科学学科、薬学部 (薬学科)、医療福祉学部 (医療福祉・マネジメント学科)。うち医療福祉・マネジメント学科については福祉、マネジメントの 2 領域がある。

(2) 評価尺度

研究 1~3

Interdisciplinary Education Perception Scale (IEPS)³⁾ と Readiness for Inter-Professional Learning Scale (RIPLS)⁴⁾ を用いて、同 IPE プログラムの教育効果を検討した。IEPS は専門職アイデンティティ、RIPLS は IPE に対する態度の評価が可能な評価尺度であり、それぞれ 18 項目×6 段階 (104 点満点)、19 項目×5 段階 (95 点満点) から構成されているリッカートスケールである。

IPE プログラムの教育効果については複数の評価尺度が開発され、複数のレビューでそれら評価尺度の妥当性や信頼性を含めた有効性が検討されている。多くの評価尺度がその有効性に限界

があることが報告されているが、その中でも多くの先行研究が IEPS と RIPLS を用いて IPE 参加学生の態度を測定している。加えて、IPE に対する学生の態度は、効果的な IPE の実装を妨げる最大の障壁となる可能性も指摘されている。

研究 4

・学習観：学習観尺度⁵⁾

大学生の学習観を測定する 5 段階リッカート・スケールの質問紙調査票。高山が作成したオリジナルの尺度 69 項目のうち、「詰込的学習観」の下位尺度「記憶」8 項目、自律的・充実的な学習観の下位尺度「主体的探究」13 項目、計 21 項目を使用した。

・学習動機：大学生用学習動機づけ尺度⁶⁾

大学生の学習活動に対する動機づけを測定する 5 段階リッカート・スケールの質問紙調査票。「高動機づけ」「自律」「取り入れ・外的」「低動機づけ」の 4 下位尺度、36 項目から構成される。

(3) 手順

研究 1：段階的 IPE プログラムの教育効果に関する縦断調査

4 年次 IPE が選択科目であるため、2016 (平成 28)、2017 (平成 29)、2018 (平成 30) 年度の 4 年次 IPE 履修者 505 名を対象とし、それぞれ 2014(平成 26)-2016(平成 28)、2015(平成 27)-2017(平成 29)、2016(平成 28)-2018(平成 30)年度の 3 期間について、2 年次 IPE 後、3 年次 IPE 前後、4 年次 IPE 前後の合計 5 時点で測定した両評価尺度のデータを後ろ向きコホート解析した。

統計解析には、IEPS、RIPLS のいずれについても、年度、時間経過を要因とした二元配置分散分析を実施した。交互作用および、年度間の主効果が認められなかった場合、年度間の各測定尺度の変化様態が年度間で同一であると判断し、両年度のデータを統合して、時間経過を要因とした一元配置分散分析を実施し、下位検定として Scheffe 法を用いた。いずれについても、効果量²を求めた。また、欠損値がある場合は解析対象外とした。

研究 2：入学直後から 4 年間の縦断調査

研究 1 の 3 年間の縦断調査に加え、2019 (平成元) 年度より、入学直後の IPE カリキュラム受講前の学生を対象とした測定を開始し、2022 (平成 4) 年度までの 4 年間の縦断調査を実施した。評価尺度は研究 1 と同様で、統計解析は時間経過を要因とした一元配置分散分析を実施し、下位検定には Scheffe 法を用い、効果量²を求めた。また、欠損値がある場合は解析対象外とした。

研究 3：キャンパス間比較

当該大学では複数キャンパスで同一の 3 年間の IPE プログラムを実施している。複数キャンパスのうち大川キャンパスでは、2020 (令和 2) 年度より 3 年間の各 IPE カリキュラムを、階層性および連続性を考慮した IPE プログラムとして、社会構成主義を背景理論とし、教育設計理論に立脚してインストラクショナル・デザインを再考した。その再設計による教育効果を検討するため、2020 (令和 2)、2021 (令和 3) 年度の複数年度調査結果を、旧来の教育設計である大田原キャンパス (研究 1・2) での教育効果と比較した。

研究 4：学習者の学習観に関する調査

研究対象である IPE において、学習者の主体的・能動的学習態度を涵養する前提として、学習者の学習観を把握する必要がある。2) 従来の IEPS、RIPLS に加え、新しい観点から教育カリキュラムの教育効果を検討する、ことを目的として、2021 (令和 3) と 2022 (令和 4) 年度の理学療法学科新入生合計 126 名を対象として、評価尺度(2)- を用いて、その学習観、学習動機を調査した。

いずれの尺度も、5 件法で得られた回答を肯定度の強い方に高い得点を与えて 5 点満点で点数化し、各下位項目の合計値を変数として、ピアソンの相関係数、²適合度検定により分布を検討した。また、学生のグループ分けにはサンプルクラスター分析(ユークリッド距離、ワード法)、従属変数のグループ間比較には一元配置分散分析を用いた。学習動機づけ尺度とリアリティシヨック尺度については、学習観により分類されたクラスター間において、対応のない t 検定、一元配置分散分析を用いて比較した。一元配置分散分析において主効果が有意であった場合、下位検定として Turkey 法を実施した。各検定の有意水準は 5% とし、効果量(Cramer's V、²、Cohen's d)を算出した。

(4) 倫理

本研究は国際医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した (14-10-88、21-1fh-003)。

4. 研究成果

研究 1：段階的 IPE プログラムの教育効果に関する縦断調査

自職種アイデンティティ (IEPS) と IPE に対する態度 (RIPLS) のいずれについても、3 期間間の変化様態に差は認められず (²: 0.002, 0.02)、交互作用も認められなかった (²: 0.006,

0.01)。これらのことから同プログラムの教育効果について、学習者の非等質性に依存しない一般化可能性が認められた(図1)。

また3期間のデータを統合して検討したところ、最終学年の IPE プログラムの教育効果は高く、2・3 年次の IPE プログラムは最終学年の IPE プログラムに対するレディネス形成に大きく影響していることが示唆された(η^2 : 0.06, 0.11, 図2)。

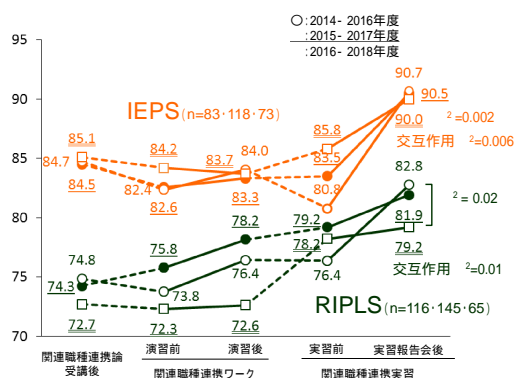


図1. 3 期間の IEPS、RIPLS の変化

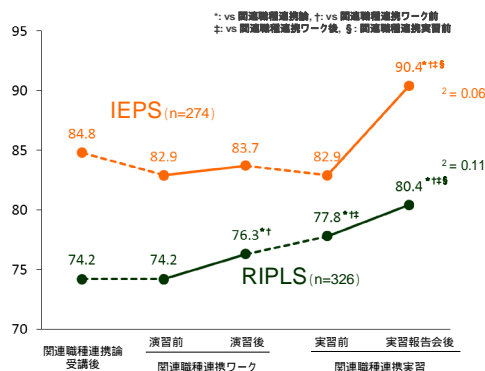


図2. 3 期間統合した IEPS、RIPLS の変化

研究2：入学直後から4年間の縦断調査

結果として、入学当初は自職種アイデンティティ (IEPS) ならびに IPE に対する態度 (RIPLS) のいずれも高値であったが、IPE プログラム開始時(2 年次)には有意に低下し、学年および当該プログラムが進行するに従っていずれも向上した。以上のことから、入学から IPE プログラムが開始されるまでの間に、「学業に対するリアリティ・ショック」の存在が示唆された。しかし一方で、3 年次までの IPE プログラムの教育効果をより高める必要性も示唆され、適切なインストラクショナル・デザインなどの検討の必要性が強調された。

研究3：キャンパス間比較

結果として、大川キャンパスの当該 IPE カリキュラムは、1) 2020 年度よりも 21 年度の教育効果が高い、2) 大田原キャンパスの同カリキュラムよりも教育効果が高い、ことが明らかとなり、適切なインストラクショナル・デザインにより教育効果が高まること期待できた(図3)。

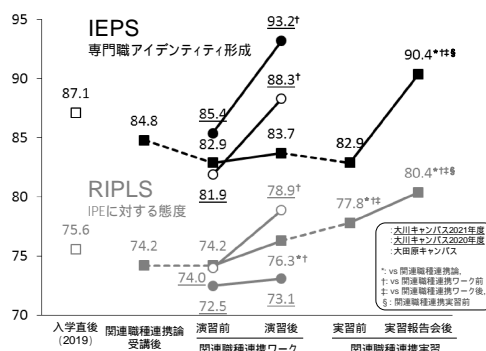


図3. 2 キャンパス間の IEPS、RIPLS の変化

研究4：学習者の学習観に関する調査

126 名の対象のうち 124 名から、本研究で利用した尺度の全ての項目について回答が得られた(回答率 98.4%)。

クラスター分析の結果として2 年度とも、学習者は 1) 古典的な詰込的学習感を強く有する学習者、2) 自律的・充実的な学習観を強く有する学習者、3) 2 つの学習観を併有する学習者の 3 群に分けられること、特に 3 つ目の学習者群は、保健医療福祉領域に特徴的な学習観を有している可能性が示唆された。また、年度間で同様の分類ができたことから、学習観についての 3 分類の一般化可能性も示唆された(図4)。

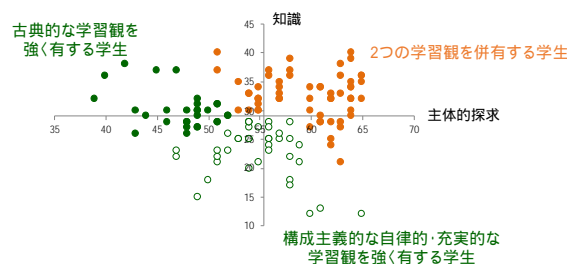


図4 学習観 2 変数の散布図

学習観により分類された3 グループ間で学習動機を比較した結果、知識注入主義的学習観を比較的強く有するグループ1 は、構成主義的学習観が比較的強く有するグループ2 と、それら 2 つの学習観を併有するグループ3 よりも外的が有意に高値、同一化、内発が有意に低値で、RAI が有意に低値であった($p < 0.05$, η^2 : 0.06~0.19)。また、グループ3 はグループ2 よりも取り入れが有意に高値であった(表1)。

加えて、学習観尺度の下位尺度である主体的

表1 全学生および各グループ別の学習動機尺度 η^2 : 対グループ1, \dagger : グループ2

	グループ			p	η^2
	1	2	3		
外的	6.1 ± 1.9 (2.0 ± 0.6)	4.6 ± 2.2* (1.5 ± 0.7)	4.8 ± 2.0* (1.6 ± 0.7)	0.005	0.08
取り入れ	48.3 ± 9.3 (3.2 ± 0.6)	46.2 ± 8.1 (3.1 ± 0.5)	51.0 ± 8.2* (3.4 ± 0.5)	0.03	0.06
同一化	17.1 ± 2.0 (4.3 ± 0.5)	18.5 ± 1.4* (4.6 ± 0.4)	18.7 ± 1.6* (4.7 ± 0.4)	< 0.001	0.14
内発	37.8 ± 7.0 (3.1 ± 0.6)	44.5 ± 6.0* (3.7 ± 0.5)	45.4 ± 9.5* (3.8 ± 0.8)	< 0.001	0.13
RAI	3.3 ± 1.9	5.9 ± 1.9	5.7 ± 2.6	< 0.001	0.19

探求と同一化、内発との間に中くらい (medium) の効果量の正の相関が認められた ($r = 0.41$, 0.46 , $p < 0.001$)。

以上 4 研究を総括すると、まず、研究 1 より、複数年にわたる階層的 IPE プログラムは、学生の専門職アイデンティティおよび IPE に対する態度のいずれをも構築する教育効果を有していることが明らかとなった。それらの教育効果は、各年度の学生の非等質性に依存しない一般化可能性を有していたとともに、最終学年の IPE プログラムの教育効果は高く、2・3 年次の IPE プログラムは最終学年の IPE プログラムに対するレディネス形成に大きく影響していることが示唆された。

この 3 年間の縦断調査に、入学直後の学生を対象とした測定を加えて 4 年間の縦断調査を実施した研究 2 では、入学から IPE プログラムが開始されるまでの間に、学業に対するリアリティ・ショックの存在が示唆された。しかし一方で、3 年次までの IPE プログラムの教育効果をより高める必要性も示唆され、適切なインストラクショナル・デザインなどの検討の必要性が強調された。

この知見をもとに、階層性および連続性を考慮した IPE プログラムとしてインストラクショナル・デザインを再考し、異なるキャンパス間で比較した研究 3 により、その再設計による教育効果を検討した。結果として、適切なインストラクショナル・デザインにより教育効果が高まることが期待できた。

さらに、IPE において、学習者の主体的・能動的学習態度を涵養する前提として、学習者の学習観を把握する必要があること、新しい観点から教育カリキュラムの教育効果を検討することを目的として、学習者の学習観調査を開始した (研究 4)。結果として、学習者は、古典的な詰込的学習感を強く有する学習者、自律的・充実的な学習観を強く有する学習者、それら 2 つの学習観を併有する学習者の 3 群に分けられること、特に 3 つ目の学習者群は、保健医療福祉領域に特徴的な学習観を有している可能性と、学習観についての 3 分類の一般化可能性が示唆された。

参考文献

- 1) World Health Organization, Framework for Action on Interprofessional Education and Collaborative Practice, World Health Organization, Geneva, Switzerland, 2010, http://apps.who.int/iris/bitstream/10665/70185/1/WHO_HRH_HPN_10.3_eng.pdf
- 2) 下井俊典、橋本光康、糸井裕子他：国際医療福祉大学大田原キャンパスにおける関連職種連携実習 -学習理論による実習の分析-。国際医療福祉大学学会誌 23(1)、89-103、2018
- 3) Parsell G, Bligh J : The development of a questionnaire to assess the readiness of health care students for interprofessional learning (RIPLS). Medical Education . 1999; 33: 95-100 .
- 4) Luecht RM, Madsen MK, Taugher MP, Petterson BJ : Assessing professional perceptions: design and validation of an Interdisciplinary Education Perception Scale. J Allied Health . 1990 ; 19 (2) : 181-91.
- 5) 高山草二. 大学生の学習観の特徴と構造. 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学) 2000; 34: 1~10
- 6) 岡田涼, 中谷素之. 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響 -自己決定理論の枠組みから-. 教育心理学研究 2006; 54: 1-11

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 西城 卓也、堀田 亮、藤江 里衣子、下井 俊典、清水 郁夫、川上 ちひろ	4. 巻 53
2. 論文標題 1. 困難な状況にある学習者へのアプローチを再考する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 医学教育	6. 最初と最後の頁 23～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11307/mededjapan.53.1_23	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 下井 俊典、川上 ちひろ、西城 卓也	4. 巻 53
2. 論文標題 5. 「座学はできるのに実技は苦手」は、なぜ起きるのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 医学教育	6. 最初と最後の頁 49～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11307/mededjapan.53.1_49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 倉持龍彦, 對馬栄輝, 下井俊典, 井口豊, 宮田賢宏, 長江裕吾, 大塚紹, 若狭伸尚, 村野勇, 濱谷陸太, 金地嘉久, 米津太志, 角田恒和	4. 巻 32
2. 論文標題 統計解析を用いた妥当性の評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医工学治療	6. 最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 下井俊典	4. 巻 54
2. 論文標題 資料 理学療法教育における学習理論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 理学療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 478～481
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.1551201883	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 下井 俊典	4. 巻 13
2. 論文標題 【わが街のIPW】栃木県大田原市の多職種間連携	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本保健医療福祉連携教育学会学術誌・保健医療福祉連携	6. 最初と最後の頁 27～29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32217/jaipe.13.1_27	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下井俊典	4. 巻 24
2. 論文標題 scaffolding の概念および背景理論の紹介と再分類の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際医療福祉大学学会誌	6. 最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下井俊典	4. 巻 54
2. 論文標題 理学療法教育における学習理論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 理学療法ジャーナル	6. 最初と最後の頁 478-481
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 倉持龍彦, 對馬栄輝, 下井俊典, 井口豊, 宮田賢宏, 長江裕吾, 大塚紹, 若狭伸尚, 村野勇, 濱谷陸太, 金地嘉久, 米津太志, 角田恒和	4. 巻 32
2. 論文標題 統計解析を用いた妥当性の評価	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医工学治療	6. 最初と最後の頁 3-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下井俊典	4. 巻 11
2. 論文標題 国際医療福祉大学のIPC実習「関連職種連携実習」について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保健医療福祉連携	6. 最初と最後の頁 97-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Toshinori Shimoi, Yoshio Takano, Nozomi Hamachi, Ryota Okoba
2. 発表標題 Relations between Conceptions of learning and motivation in first-year physical therapy students in Japan
3. 学会等名 Association for Medical Education in Europe (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下井俊典、濱地望、大古場良太、有家尚志、高野吉朗
2. 発表標題 理学療法学科新入生が有する学習観の複数年度調査による一般化可能性
3. 学会等名 11回日本理学療法教育学会学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下井俊典
2. 発表標題 実践的な薬剤師の育成に向けた卒後教育 (臨床研修) の新展開
3. 学会等名 第7回日本薬学教育学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 下井俊典、新井田孝裕、野呂千鶴子、橋本光康、佐藤信也
2. 発表標題 国際医療福祉大学『関連職種連携教育』が有する教育効果の縦断的調査（第一報）-キャンパス間比較による検討-国際医療福祉大学『関連職種連携教育』が有する教育効果の縦断的調査（第一報）-キャンパス間比較による検討-
3. 学会等名 第11回国際医療福祉大学学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下井俊典、濱地望、鈴木あかり、大古場良太、有家尚志
2. 発表標題 理学療法学科入学生が有する学習観と学習観をもとにしたカリキュラム・デザインの可能性
3. 学会等名 第10回日本理学療法教育学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Toshinori Shimoï
2. 発表標題 The educational effects of the stratum interprofessional education program on the students of rehabilitation disciplines
3. 学会等名 5th European Congress of the European Region WCPT (国際学会)
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 下井俊典、橋本光康、新井田孝裕
2. 発表標題 入学時調査データと比較した階層的IPEプログラムが有する教育効果
3. 学会等名 第13回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下井俊典
2. 発表標題 世界の視点で地域のIPEをつくる
3. 学会等名 第13回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下井俊典、橋本光康、新井田孝裕
2. 発表標題 階層的IPEプログラムが有する教育効果の一般化可能性（第2報）-IEPS・RIPLSのサブスケール別の検討-
3. 学会等名 第12回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下井俊典
2. 発表標題 階層的IPEプログラムが有する教育効果の領域別検討
3. 学会等名 第8回日本理学療法教育学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下井俊典、橋本光康、新井田孝裕
2. 発表標題 階層的IPEプログラムが有する教育効果の一般化可能性
3. 学会等名 第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下井俊典、渡邊観世子、石坂正大他
2. 発表標題 リハビリテーション3領域学生に対する階層的多職種間教育の教育効果
3. 学会等名 第31回教育研究大会・教員研修会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshinori SHIMOI
2. 発表標題 The generalizability of educational effectiveness of the "step-by-step IPE program" in The International University of Health and Welfare
3. 学会等名 All Together Better Health Conference (The 9th international conference for Interprofessional Education and Collaborative Practice) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下井俊典
2. 発表標題 国際医療福祉大学のIPEプログラムの紹介 -階層性の検証とこれから-
3. 学会等名 第71回医学教育セミナーとワークショップ (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	小嶋 章吾 (Kojima Shogo) (90317644)	国際医療福祉大学・医療福祉学部・教授 (32206)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------